様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月８日現在

研究種目：若手研究（A）
研究期間：2006 年度～2008 年度
課題番号：18682002
研究課題名（和文）　近代メディアとナルシシズム――「文学的表象システム」に関する研究
研究課題名（英文）　The Modern Media and Narcissism：a Study of “Literary Representation System”

研究代表者
森本淳生（MORIMOTO ATHUO）
一橋大学・言語社会研究科・准教授
研究者番号：90283671

研究成果の概要：
私的領域と公的領域の近代における交錯のありようを、１９世紀後半から２０世紀前半のフランス文学を対象に、ナルシシズムとメディアの問題として考察した。ローデンバック、マラルメ、ヴァレリー、ジッド、ルイス、ギャスケなどについて具体的な考察を行い、ナルシシズムがメディアへと接続されていく様子を観察することができた。そこから、問題は、近代人が自分の生の痕跡を残そうとする「生表象の空間」として捉えなおすことができることが分かり、新たな研究の領域が明らかになった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2007 年度	2,300,000	690,000	2,990,000
2008 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
総　計	7,700,000	2,310,000	10,010,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：近代文学、メディア、ナルシシズム、表象、象徴主義

１．研究開始当初の背景
インターネットをはじめとする現代メディアの発展は、われわれのコミュニケーションや情報流通の可能性を飛躍的に拡大する一方で、いわゆる「引きこもり」や「オタク」などの自己閉塞的な精神形態をもたらすという、逆説的状況を生みだした。携帯電話は、個人間の通信を究極的に容易にしたが、他方で携帯依存症などを引き起こしもしたのである。本研究の背景をなす基本的な問題関心は、「パブリック」と「プライヴェート」のあいだに現れた、こうした一見したところ奇妙なねじれ現象に対して、文学・思想史研究がどのような理解をもたらすことができるのかという点にあった。

２．研究の目的
１８世紀半ば以降のヨーロッパ近代文学

は、自覚的な「作家」を生み出し、主にその「内面」の表現として文学を規定してきた。しかし、そうした自律的表現を可能にしたものは、それまでの王侯貴族のメセナにとってかわる形で、近代資本主義と軌を一にして勃興した出版ジャーナリズムである。文学はここで商品経済と不可分になる。こうして、一方ではルソーにはじまり、マラルメ、ヴァレリーといった、自己の内部に沈潜し外界を虚偽とみなす一連の作家（その極限が「純粋文学」）が生まれる一方で、大衆小説が量産されていく。

ここで言う「純粋文学」とは、とりあえずは、「私」（「個別的なもの」）の探究をより徹底して行おうとするものだが、そのような試みは自己自身を対象として、言説の一般的な流通からは離れて行わざるをえないとしても、自己内部に見出されるのがまさにエクリチュールであるとすれば、結局は言説空間一般の力学に従っていることになる。このような近代文学は、したがって、言説空間から一般的規定を受けながらも、それを極私的領域へと屈折させること、ひとことで言えば、言説空間の力学に従いつつ反発する、という二重の矛盾的挙措を特徴としている。

こうした自己矛盾的な二重の挙措を、エクリチュールの側面から考えるとどうなるだろうか。１９世紀以降の近代は、個人とエクリチュールがこれまでになく近接した時代である。識字率（読み/書き）は著しく増大し、新聞や書物の私有が可能になっていく。と同時に、普及した日記、バルザックの「人間喜劇」のような社会全体を捉えようとする小説、さまざまな観光ガイド（その背景としての鉄道網の整備）は、人間生活のあらゆる細部を書き記していく。文学もこうした動きに無縁ではない。実際、ロマン主義は内面の機微を歌い、リアリズムは社会を記録した。このように記録する傾向が全面化するなか（印刷・写真・録音・記憶媒体の発明と改良、図書館の整備など）、流通する言説は一般性を帯び、「凡庸」化する（言説ないし情報のインフレーション）。こうした言説空間の大きな力学に抵抗しようとしたのが何人かの近代作家である。ヴァレリーも、この力学に抗って、オリジナルで私的な領域としての『カイエ』を確保しようとする。しかし、そこでの基本的なツールはやはりエクリチュールであり、（例えば座禅のように）決して非言語的な自己探求が特権化されたりはしない。その意味で、すべてを書こうとする大きな力学に抗いつつも従っていることになる。あるいはむしろ、自己内部でのその徹底化ということもできるかもしれない。

本研究の具体的な目的は、近代文学のエクリチュールをめぐって生じたこのような二極的な現象を、主に１９世紀後半から２０世紀前半の時期をコーパスとして、実証的に跡づけるとともに、この事象を統一的に理解可能にする理論的な枠組みを構築することである。

３．研究の方法

より具体的には、マラルメとヴァレリーを主要事例として取り上げ、彼らの作品・書簡・草稿（ヴァレリーの場合はとりわけ『カイエ』）を精読し、またフランス象徴主義の周辺諸作品をも十分に勘案することを通じて、彼らが自己の本質的営為として企図した作品の構想が、近代メディアに対する彼らの考察や当時のメディア自体の状況とどのように関連しているのかを明らかにする。他方で、そこから得られた知見との有機的連関のもとに、作家が自己の作品を構想する私的領域と、作品が流通・消費される公的領域とを横断的に規定する、近代の「文学的表象システム」の理論的なモデルの構築を、先行研究を踏まえつつ試みる。

４．研究成果

具体的成果としては次の諸点が挙げられる。

(1)ローデンバック『死都ブリュージュ』における鏡像とメディア：この作品においては、従来指摘されてきたように運河に街並みが映ることで、街並みが二重化され、きわめて象徴主義的な鏡像の閉鎖的世界が醸し出されている。この反映はさまざまレベルに存在する。主人公ユーグ/亡妻、人物/都市、ユーグ/ブリュージュ、亡妻/ブリュージュ、亡妻/愛人ジャーヌ、ユーグ/ジャーヌ――以上の二項は互いに類似し反映する関係にあることが小説の中で強調されているのである。こうした鏡像関係は、他方で、危機にも陥る（自分の鏡像をじっと眺めることは恐ろしい体験である）。そして、亡妻の面影を求めて愛したジャーヌに主人公ユーグがやがて亡妻との違いを気がつきはじめることで、この鏡像関係は破綻することになる。こうして、類似によって、死んだ妻を甦らせるユーグの試みは失敗するのである。それは別の観点から言えば、聖（亡妻、ブリュージュ）に対して俗（ジャンヌ）がなした冒瀆が夢の世界（鏡像）を破綻させてしまったということである。ユーグはこのことに耐えられず、ジャンヌを殺し、死の世界を復興させる。破られた鏡像世界の回復がなされるわけである。しかし注目すべきことに、このような鏡像世界の自律と閉鎖性が称揚される本作品において、主人公の行動を監視する働きをなす入り口にとりつけられた鏡が存在しており、この鏡によって得られた情報は住民の間に口コミで広がっていく。つまり、ナルシシズム的な反映のテーマは鏡という装置を通じて、メディアの

問題へと接続されているのである。

やや理論化して述べるなら次のようになろう。鏡（現在ならばビデオカメラ）で捉えられた個人の行動は、噂として反復・伝播する（現在なら映像として世界中で流される)。同一性が無限に反復されるという意味で、この社会的な情報空間もひとつの「鏡像空間」であると言える。他方で、サンボリスム（あるいは近代文学全般）には、社会的鏡像空間を蔑視し、個人（やグループ）に自閉した鏡像空間を作りだそうとする傾向がある（ユーグの亡妻の部屋、「鏡の友」の「友人」)。ユーグがバルブが出ていくまで噂のネットワークに気がつかなかったのは、そうした文学と社会の分断を、文学の側から描きだすものである。しかし、両者は基本的には同じ構造を持っており、相似するもののように重ね合わせることが可能である。サンボリスムが社会に対して自閉的にまったく別の構造をもつ世界を創ったというよりは――もちろん、意識のうえでは同時代の社会に反発したのは確かではあるが、実際上は――、〈同一性を増幅させる鏡像空間〉という社会を貫く構造を、文学創造へと導入し、より純粋な形で作品として造形したのではないか。つまり、「内面」は、社会から自閉することだけで成立するのではなく、内面の構造は社会と同じ構造をもっているのである。内面（亡妻の部屋、鏡の部屋）に閉じこもったとしても、その部屋の鏡像空間は社会へと繋がっているのである。

(2)マラルメにおける鏡像とメディア：「yx のソネ」や「窓」を通じて、詩句の鏡像関係や鏡像のテーマを確認したのち、「孤独」の読解を通じて、師と弟子たちの共同体が一種の表象空間によって可能になることを明らかにして、鏡像のテーマがより広い空間へと接続されていく様子を考察した。ローデンバックの場合が、同一者の鏡像による自己増殖であったとするならば、ここで問題になっているのは、鏡像を通じての他者同士の同一化である。エッセー「孤独」が描き出すのは次のような事態である。「師」はいつまでも同じ「師」として認知されつづけずに、「多数」でかつ「非人称」「匿名」の存在へと変わる。それが、（マラルメの言う）文学者たちの集団の硬直性や（〈世間的名声の定まった大家とそのエピゴーネン〉ではなく)、社会的なラベル付けを回避し、つねに社会から距離をとった生き生きとした集団であることを保証する（と、マラルメは夢想する)。〈群衆と祝祭〉論（個と全体の融合――後述）から補助線を引くことが許されるなら、「師」は〈多数-非人称-匿名〉であることによって、いかなる個別性にも阻害されることなしに、「弟子」たちの欲望の投影を引き受けることができる（＝誰でもあって、誰でもない)。「弟子」はそれぞれ自分の思うところを「師」に投げかけることができる。こうして、異質な他者同士の同一化＝集団化が可能となる。マラルメは、中心的な形象の個別的特徴を無化し、それが集団の各要素のいずれでもありえる（そしてまた、いずれでもない）ような場合を考えており、こうした空虚な中心をつくり出すことによって「作品」（人々の朗誦からなる会）を成立させようと夢想した。こうして、師と弟子からなる詩人の集団をこえて、万人（群衆、民衆）が交感する〈祝祭〉をマラルメは構想する。そこにおいても、詩人は、必要な行為（詩の朗誦）ののちに消滅し、中心は空虚となり、交感が成立するとされるのである。

こうしたマラルメの公衆論は、1870 年代に試みられた雑誌『最新流行』において、さらにメディア空間にまで拡大されていることが具体的読解を通じて明らかにできた。そこには、鉄道旅行の案内に並んで、モードの紹介、鏡のテーマ、反響や反映のモチーフが呈示されており、象徴主義とメディア、交通網が関連する様子を観察することができるのである。

(3)ヴァレリー、ジッド、ルイス：マラルメの弟子にあたるこの３人の作家について、同じように鏡像とメディアの問題を考察した。ヴァレリーやジッドはナルシスについてエセーや詩を書いているが、彼らはまた濃密な書簡の交換によって、文字通りナルシス的な関係（ホモソーシャルな関係）を生きた。本研究では、このことを具体的に踏査するために、最近公刊された３人の書簡集、とりわけその最初期の書簡を精読・訳読する作業を行い、成果を公表した。この時期をひとことでまとめるとすれば、それは「ナルシスたちの出発」とすることができるだろう。これはたんにヴァレリーがナルシスのテーマをとりあげたこと（詩篇「ナルシスは語る」）にちなむだけではない。彼らはそれぞれ自分の言葉を投げかける相手を必要としており、そうした相互交流（相互反映）のなかで自己を形成していったからである。そこには一種の「友情の詩学」とでもいったものがあった。例えば、ヴァレリーはジッドと会った思い出を有名な「友情の森」というソネットにしているが、これはルイスが偏愛した９音節詩句で書かれたものであった。つまり、友人同士が並んで森を歩むという詩に、もうひとりの友人がさらに歌いこまれていたわけである。こうした詩を通じて友情を編み出していくという作業は、のちに『コンク』誌での詩のやりとりにおいてより組織的に追求されることになる。理論的結論を引き出すことが許されるとすれば、文学者は自己を確立するにあたって、メディア（ここでは書簡のやり取り、パリと地方――ヴァレリーはモンペリエ

という地方都市にいた――との関係、雑誌という媒体）に大きく依存しているということである。その意味で、この書簡集は近代における文学と社会との関係を明らかにするための重要な資料であることが明らかになった。

(4)ギャスケ『ナルシス』: 象徴詩人ギャスケの『ナルシス』は現在まったく忘れ去れたテクストであるが、これを読み直す作業を行った。ヴァレリーの『ナルシス断章』と同様に、ナルシス的な相互関係が、女性排除とホモソーシャルな関係を求めるものであることが読み取られた。

まず、このテクストにおいて、ナルシスの出現は父の死と連関している。父は現実には自殺したのだが、精神分析的に言えば、想像のうえでは「私」によって殺害されている。「私」による出生への懐疑も父の殺害を意味する。しかしこうして殺された父は、ナルシスとして回帰する。だからこそ、ナルシスに父の面影を見出したとき、「私」は恐怖を感じるとともに、その殺害を確認して喜びを感じるのである。父という超越的存在を消去したときに現れる、自己鏡像的な関係としてのナルシシズムという図式がここには見られる。こうして、ナルシスの出現は「私」の無意識的な欲望の次元と関連をもつ。「私」はそれをさらに思春期における欲望の抑圧と結びつけている。もし女性へと欲望が開かれていたならば、病気は発症しなかっただろうというわけである。その意味で、ナルシスはエロスが他者へと向かわずに自閉することのメタファーとなっているようだ。こうして「私」はナルシスとして生き、ナルシスという分身につきまとわれることになる。

父親を排除して成立する自閉的な「私＝ナルシス」の関係は、世界をも内包することになる。つまり、すべてを私の表象と考えるショーペンハウアー的な論理をいいかえて、すべては世界の自己表象であるという論理が主張されるわけである。こうして、「私＝ナルシス＝世界」という定式化がなされることになるが、それが完全な二重化として実現されるのは、「私」の死によってのみであるとされる。やがてそこにカチャとの異性愛が出現し、それがナルシスとの友情と相克することになるが、結局ナルシスとの天上的な世界へと超克されていくことになる。つまり、ナルシスとの関係は「死」によって完成されるのである。語り手は次のように言っている。「私の行為のひとつひとつは、普遍的行為の充溢のなかに生きています。この宇宙を感じるためには、あなた方はみな、あなた方の狭量な人格の意識を失う必要があります、そして私はといえば、今やお分かりでしょうが、それは私において意識をもった世界であり、そのさいには世界の無限の人格のいかなるものも失われないし、私の意識のなにものをも吸収することはないのです。私はナルシスです。」(p. 105)

(5)生表象の動態構造 : 理論モデル構築の問題については、ナルシシズムとメディアという論点は、「生表象 représentation de la vie の空間」として把握されうることが分かってきた。この生表象の空間とは、ひとびとが自分の生の痕跡を書き付ける空間であり、具体的には出版のみならず、ブログや日記などとして現れる。またこの空間はそれぞれの語圏、文化圏に応じて中心をもち、さまざまなレベルに階層化されている。文学ないし言説の空間を世界という視点から見たとき、それはいわゆる一国主義的な歴史観を超えて、多層的で多中心的な空間として立ち現れてくる。この問題を近年詳しく展開したのがパスカル・カサノヴァである(『世界文芸共和国』)。彼女によれば、世界文芸共和国は、パリ（フランス語圏)、ロンドン・ニューヨーク（英語圏)、バルセロナ（スペイン語圏)、ベルリン（ドイツ語圏）などの中心と、西欧世界に属する周辺地域（彼女の言葉ではないがいわば「近い」周辺)、および植民地化された「遠い」周辺（インド、アフリカ、ラテン・アメリカなど）からなる。文学の最先端を走り、「文学世界の首都」として、あるべき世界文学の基準を定め、作品を選別するのはなによりもこうした中心なのである。しかし、言うまでもないことだが、ここで彼女が暗黙のうちに前提しているウォーラーステイン流の世界システム論には重大な不備がある。それは日本の読者にとってはほとんど自明のことだ。実際、ここで言われている世界とは、ヨーロッパを中心とするものにすぎず、そのイデオロギーはほとんど恥ずかしいほどに西欧の植民地主義を反復している。こうした不備を補完し、生表象の動態構造をアジアも含めた世界的な時空において考察することが必要だろう。世界全体でみれば生表象の空間は多中心的かつ多層的なのである。そしてこのような空間に、近代人はみずからの生の痕跡を記録しようとした――その意味で、そこには「痕跡衝動」とでも言うべきものが確認される。以上は結局、広義の自伝、オートフィクション、ライフ・ヒストリーなどの問題でもあり、この点については今後も研究を重ねていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計３件）

(1) 森本淳生、「生表象の動態構造――素描」、『言語社会』第３号、一橋大学大学院言語社会研究科、査読無し、2008、p. 47-67.

(2) MORIMOTO ATHUO、« L'implexe chez Valéry : une notion de potentialité et la théorie motrice de la psychologie à l'époque

de Valéry », Jean-Louis Le Moigne et Edgar Morin, éd. Intelligence de la complexité. Épistémologie et pragmatique, Éditions de l'Aube, 査読無し, 2007, p. 387-392.
(3) MORIMOTO ATHUO 、 « L'espace imaginaire et le problème de l'inconscient chez Valéry », Paul Valéry 12, image, imagination, imaginaire autour de Valéry, texts réunis et presentés par Sang-Tai Kim,Lettres modernes-Minard, , 査読無し, 2006, p. 185-191.

〔学会発表〕（計２件）
(1)森本淳生、「ナルシシズムと近代メディア――マラルメの場合」、日本マラルメ研究会第 14 回総会、2008 年 5 月 24 日、青山学院大学。
(2)森本淳生、「古典主義運動と不定形なもの― 第一次世界大戦期前後におけるフランス文学 ―」、共同研究「第一次世界大戦の総合的理解に向けて」、2007 年 10 月 13 日、京都大学人文科学研究所。

〔図書〕（計１件）
(1)森本淳生、アンドレ・ジッド『贋金つくり』とホモソーシャル共同体」、中野知律・越智博美編著『ジェンダーから世界を読む II――表象されるアイデンティティ』、明石書店、2008、p. 265-282.

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕
(1)《翻訳》森本淳生・塚本昌則・松田浩則・山田広昭による共訳、「アンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ポール・ヴァレリー『三声による往復書簡集　一八八八－一九二〇』翻訳の試み（二）」、『人文・自然研究』第 3 号、一橋大学大学教育研究開発センター、2009、p. 174-349.
(2)《翻訳》森本淳生・恒川邦夫、塚本昌則、松田浩則、山田広昭による共訳、「アンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ポール・ヴァレリー『三声による往復書簡集　一八八八－一九二〇』翻訳の試み（一）」、『人文・自然研究』第 2 号、一橋大学大学教育研究開発センター、2008、p. 4-175.

６．研究組織
(1)研究代表者
森本　淳生（MORIMOTO　ATHUO）
（一橋大学言語社会研究科・准教授）
研究者番号：90283671

(2)研究分担者
なし。

(3)連携研究者
なし。